

# 上海日本人学校浦東校での研究と修養

前上海日本人学校浦東校 教諭

長崎県東彼杵郡波佐見町立波佐見中学校 教諭 猪 晃一郎

**キーワード：校内研修，全職員による公開授業，授業研究会，教師の同僚性，学びの共同体**

## 1. はじめに

「教師は授業で勝負する」とよく言われる。教師の授業力を高めることが子どもたちの学力保障につながり、わかる授業、楽しい授業の展開が子ども理解につながることは、承知のとおりである。授業力を向上させるために、具体的に何をするのか。教育委員会や教育センターなど公的機関が主催する研修講座に積極的に参加する、教育書を読む、サークルに参加するなど方法は、たくさん考えられる。ただ、在外教育施設の職員は、そのような学校外の研修の機会に恵まれていない。教育書が手に入りやすく、公的な機関の研修講座などもない。

そこで、以下に上海日本人学校浦東校での取り組みと、現地校（上海子長学校）の取り組みを紹介させていただく。

## 2. 学校の実態

上海市の在住人口は約2500万人、そのうち日本人在住者は約5万人である。平成22年には万国博覧会（上海万博）も開催され、世界の中心都市として、急速に発展している大都市である。上海市は、黄浦江という川を挟み、西側の浦西地区と東側の浦東地区にわかれる。上海日本人学校は、浦西地区に小学部だけの虹橋校（全校児童数約1500人）、浦東地区に小学部・中学部・高等部（平成23年開校）がある浦東校がある。

上海日本人学校浦東校は、平成24年2月20日現在、中学部617名（1年7学級、2年6学級、3年4学級、すずかけ1学級）、小学部734名（1年4学級、2年3学級、3年3学級、4年4学級、5年4学級、6年4学級）の大規模校であった。職員は、校長1名、教頭1名、教諭60名、養護教諭2名と事務職員や門衛などを含む現地スタッフ48名で組織し、校務を運営していた。

## 3. 平成21年度～平成23年度の校内・校外研修

### (1) 平成21年度

- ①校内研究授業7回（小学部 算数・社会、中学部 英語2回・社会・数学2回）
- ②講話「上海における道德教育の現状について」上海市卢湾区教育委員会
- ③教育講演会「生きる力をはぐくむ学校教育の在り方」文部科学省初等中等教育局視学官
- ④現地理解視察研修（上海市菊園実験学校、建平実験小学）

### (2) 平成22年度

- ①公開授業及び授業研究会5回（小学部 図画工作・理科、中学部 美術・保健体育・理科）
- ②講演会「『学びの共同体』とは何か」華東師範大学 沈曉敏教授
- ③ICT研修2回、特別支援教育研修
- ④現地理解視察研修（上海高橋東陸学校、上海子長学校）
- ⑤静岡県熱海市で行われた学びの会「熱海アクションリサーチ研修会」に参加。

### (3) 平成23年度

- ①公開授業及び授業研究会59回（管理職、養護教諭も含め全職員による公開授業及び授業研究会の実施）
- ②2名のスーパーバイザーの招聘及び指導助言（東京大学大学院佐藤学教授、「学びの共同体研究会」スーパーバイザー馬場英顕氏）
- ③人権教育に関わる研修会（徳島県板野郡北島町立北島中学校 教諭 森口 健司氏）
- ④現地理解視察研修（上海张江高科实验小学、上海建平中学）
- ⑤通知表研修会（講師：蘇州日本人学校 校長 小野江 隆氏）

### (4) 考察

平成21年度の校内研修は、3年間で9教科（最低1回ずつ）の公開授業及び授業研究という状況であった。

各教科で年度当初に割り当てがあり、割り当てられた教科が公開授業を実施した。

平成22年度は、校長の強いリーダーシップのもと、「子ども一人ひとりを大切にする。」「授業を子ども全員に保障する。」という思いから、「学びの共同体」の理論を推進し、年度途中から公開授業が増えてきた。「学びの共同体」についても少しずつ理論が深まっていた。

平成23年度は、管理職を含め、全職員が授業を公開（保健体育教師が3人同時に1時間の授業を公開）した。公開授業の後には、授業研究会が開かれ、子どもの事実をもとに、子どもの変化を語り、子どものよさを一人でも多くの職員で共有した。その過程を通して、全国各地から集まった職員と同僚性を築き、学習指導力や生徒指導力、学級経営力等を高め合っていくことができた。スーパーバイザーの佐藤学氏や馬場英顕氏を招聘し、指導助言をいただくこともできた。事前に教科部会を開催し、指導内容を検討したり、公開授業学級ではない学級で授業し、修正を加えた上で授業を公開した教科もあった。また、小中職員が連携し、お互いを支援しながら研究を深めた教科もあり、以前に比べ職員の同僚性は高まった。

## 4. 「学びの共同体」の理論と実践

「学びの共同体」を軸に据えた学校づくりは、東京大学大学院教授佐藤学氏が提唱し、全国でも多くの学校が取り組んでいる。グループ学習を授業の中心に据え、年に一度全職員が公開授業を行うこと、そしてその公開授業をもとに、授業研究会を行う。授業研究会では、教師の指示や発問、動きを中心に発言するのではなく、子どもの事実に基づき、教材とどう向き合っているか、教師や子どもの発問・発言によりどういう影響があったのかななどを参観者全員で共有する。

その議論の中から、技術的な指導であったり、効果的な発問であったり教師の授業力を高めるとともに、子どものがんばりを賞賛したり、子どもに対するアプローチの仕方などを職員で協議して、生徒理解に努めていく。子どもと教材のつながり、子どもと教師のつながり、子どもと子どものつながりを深めていく。グループ学習が定着してくると、各グループに課題を提示するだけで、グループ内で学習をすすめていくようになる。

さらに、「ここ、どうするの?」「こうじゃないの?」などの声が聞こえてくるようになり、子どもと子どもの強い絆が生まれ、普段黙っていることが多い子どもも心を開き、コミュニケーション能力が高まってくる。

教師が、課題に取り組むよう促してもなかなか取り組もうとしなかった子どもも、グループで子どもから声をかけられると、「じゃ、やってみようか」という気になりやすく、教師には、声をかけにくい子どもも、級友には聞きやすいといった効果もある。教師は、子どもと子どもの声をつなぐ役割や子どもが興味・関心をもつような教材研究（教材開発）を行う。少しがんばれば解決できる第一課題（背伸びの課題）と子どもが全員わからないハイレベルの第二課題（ジャンプの課題）を設定するとよいといわれている。

授業研究会が深まれば、子どもの変容から日常の指導がうまくいかなかった事例やアプローチの仕方で指導がう

まくいった事例も話題になり、教師は悩みを一人で抱え込まず、その子どもに対しての指導やアプローチの仕方などを共有できる。また、授業研究会の中で、話題にのぼった些細な変化や頑張り子どもに直接声かけすることで、子どもはより自信になり、ますますやる気がわき出てくる。さらには、教科の枠を越えて、いろいろな教科の授業を参観するため、そこから教師自身が多くのことを学ぶことができる。授業者一人で取り組むのではなく、全職員で組織的に取り組むからこそ効果が発揮できる。

「学びの共同体」については、佐藤学氏の著書が多数出版されているので、詳細は、そちらをご覧ください。

## 5. 中国における「学びの共同体」を軸にすえた学校の紹介

### (1) 上海子長学校の取り組み

上海子長学校は、上海市普蛇区にあり、九年一貫校（小中一貫校）である。1996年に設立され、全校生徒数は約700名、教員109名、学級数28、1学級30名以内で構成されている。2006年9月から「学びの共同体」を軸に据えて学校改革をスタートした。まずは、長期目標として、7C（Continuous：持続学習、Collaborative：支え合う、Connected：組織内外の情報伝達をスムーズに、Collective：学習成果を分かち合う、Creative：創意工夫、新しい発展の糸口を開拓、Captured and codified：情報技術を活用する知識管理、Capacity building：生涯学習の習慣と能力）の学習型組織を形成した。次に、具体的な目標として、2006年9月から2009年8月の3年間で4つの研究課題（生徒の学習共同体の形成、教師の研究的学習共同体の形成＜問題解決をめざす授業研究＞、学校・家庭・地域の協力共同体の形成＜道德教育の共同体＞、党・行政・組合・教師会の管理共同体の育成）を設定した。教師の取り組みとして、研究目的の確立、研究組織の見直し、授業改善、指導力向上を目指し、授業で生じる問題を研究内容とすることや同じ教材を使った授業を数人で数回実践することなどを申し合わせた。また、異年齢で職員を構成したり、人間関係をよりよくしたり、外部環境を改善したりした。上海市浦東新区第三教育署では、2007年から「学校際授業研究連合体」を発足し、署内の教科別、都会部と農村部の学校の連携、学年や教科を超え共通の問題を解決するための連合体を組織した。また、普蛇区では、2010年から区を上げて、学びの共同体を推進して、現在に至っている。

### (2) 「学びの共同体」を中心に据えた授業づくりに取り組んだ感想（子長学校職員より）

- ① 上海市には、すべての学校で行われなければならない基礎課程、上海市独自のカリキュラムである拡張課程、学校本位で計画できる探求型課程がある。その探求型課程に位置付けて「学びの共同体」を中心に据えて学校づくりをしている。最初は、正規の教科の授業ではなく、教科外の授業として取り組んでいたが、他教師や他校との交流を機に教科の授業に取り入れ、改善にふみきった。導入時は、教師の意見を聴きながら、実施した。困ったことはみんなで集まり検討した。他の教師の教室に入り、授業を見合った。問題を1つ解決していく度に、お互いに研修を深めているという気持ちが高くなり、より深まっていった。教師自身の授業力を向上しようという意識も高まっていった。グループ活動をするると低学力層の子どもの能力が高まる。以前は、能力が高かった子どもは、自分のことだけを行っていたが、周囲の子どもに対しても気にかけるように変容してきた。
- ② 以前は、決まった少人数の子どもたちだけの発表で授業が展開されていたが、多くの子どもが発表するようになった。発言が積極的になった。
- ③ グループ学習をするにあたり、教師の話が中断されるのではないかと心配した。グループにすると子どもたちは、話し始めていたこともあったが、子どもたちと相談して、約束事を決め、改善されてきた。話が苦手な子どもも、発言するようになった。
- ④ 以前は学級の3分の1程度の人数の発言しかなかったが、現在は全員発表している。教師の話だけでなく、周囲の子どもたちの声を聴くことができる。授業がつまらないと言っていた子どもが、楽しいと言うようになった。



写真1



写真2

上記写真は、三年級（小学3年）数学（算数）「いろいろな物の周りの長さを測ろう」の様子である。最初（机上で考える）は、突っ伏して取り組もうとしていなかった子ども（写真1）が、教材（もの〈本時はひも〉）の導入とともに、積極的に取り組むようになった（写真2）。さらに授業後半になるにつれ、積極的に学習するように子どもたちが変化していった。

## 6. おわりに

上海日本人学校浦東校には、全国各地から教職員が集まっている。事務処理の方法や生徒指導の考え方、学級経営の考え方など様々であった。各都道府県から選抜された教師が、教室を開き授業を公開する。そして、授業研究会で子どもの実態をもとに変化を語り、子どものよさを一人でも多くの職員で共有し、職員と同僚性を築く。その過程の中で、学習指導力や生徒指導力、学級経営力等を高め合っていくことができれば、自分の技量が向上するとともに、子どもたちを伸ばすことができるのではないかと考えた。

全職員で授業を参観する時間の確保が難しかったり、校務など多忙を改善する必要があると思う。しかし、短い準備期間の中で全職員授業を公開することができたことは、大変すばらしく思う。職員一人ひとりから多くのことを学ぶことができた。全職員の理解と協力がなければ、実践できなかったことである。本当に、感謝申し上げたい。

時代とともに、世の中は変化している。自分が受けた教育（授業方法）にとらわれるのではなく、その変化に合わせて、対応していくことも必要である。どのように改善していけば、より効率的に効果を得ることができるのか。それを考えるときに、過去のことにとらわれず、根本から見直さなければならないこともある。

中国上海は、高層ビルが次々に建設され、地下鉄や高速道路も整備されている。2014年には、上海タワーが完成する予定で、着々と工事が進んでいる。人口も多く急速に発展している都市である。私がいたわずか3年間でさえ、道路の整備や高層ビルの建築など街並みの変化など急成長を感じた。

教育界においても然りで、子どもたちを伸ばし成長させるためにそれぞれの学校で研究が進められている。教師が専門家として成長することが、子どもの成長を助長することはいうまでもない。教師の同僚性を高め、組織として子どもの指導を行う。個人が力量を高めることももちろん大切だが、組織として行うことで効果を最大限発揮できる。

上海は、中国の各地方から多くの出稼ぎ労働者が働きに来る。一つの工事が始まると労働者が集まり、すぐに完成してしまう。まさに「一人の百歩より百人の一步。」である。これからも、この経験を生かし、学校を組織する一人の人間として、子どもたちのために尽力したいと思う。